



米長邦雄さん 1943年山梨県生まれ。中央大学経済学部中退。56年に故・佐瀬勇次名譽九段門下にて。72年の棋聖位を皮切りに各タイトルを得て、93年、50歳で名人位を獲得。

あると聞きましたが、どのような考えで教育にあたってきたのか、まず、その点からうかがえますか。
雨宮 本学のルーツをたどると、一五九二年に江戸・駿河台の吉祥寺境内に創立された「学林」に行き当たります。禅の実践、仏教の研究、漢学の振興を目的とする仏門の養成所（麻壇林と称す）として、江戸から明治にかけて大いに実績を残しました。大正期には一般学生にも門戸を開き、戦後の新制移行を受けて、文科系総合大学として今日に至っているのは「存じの通りです」。

米長 私はかねがね、人間は、人様の役に立ち「共に勝つこと」こそが大事だと考えていて、教育でいえば、知識よりもむしろ「心のありよう」をもっと教える必要がある——。人の心に教育の基盤を求める駒澤大学のフィロソフィーは、時勢に関係なく正しいものであるし、むしろ、この時代の日本にこそ求められるものではないですかね。
雨宮 まさに、おっしゃる通りだろうと思います。
米長 昨今、これまでの偏差値教育を

米長 日本の社会はいま、政・官・財界含めてあらゆる面で行き詰まっていますね。明治以来、百年の近代化の歩みのなかで常に「他者に勝つこと」に絶対的価値を置き、教育でいえば、知識万能の偏差値教育を施してきたことが、徐々に歪みをもたらして、ここへきて

ついに価値観のビッグバンを引き起こしたのだと、私は理解しているんです。この誤りをただすには、たかだか百年を顧みて反省するのでは事足りない。もっと長く、深く、普通の真理に立ち返る必要があると思うんです。
駒澤大学は、四百年におよぶ歴史が

そういう駒澤大学の四百年の歴史のなかで一貫して変わらないのは、禅の教えに基づいた「行学一如」——学びとつた知識を自ら考え実践することが大事——という建学の精神であり、禅の精神に基づいた豊かな人間教育を実践しています。

学問に心のありようを問う

禅の精神に基づく人間教育を、四百年の長きにわたって貫いてきた駒澤大学が、偏差値教育の弊害が噴出する今日、学びの原点を見つめ直す改革に取り組んでいる。その「心の教育」の透徹ぶりは、米長邦雄永世棋聖の目に清々しく映った。

ようやく見直す機運が現れはじめて、大学制度そのものが曲がり角にきています——そう、お感じになりませんか。
雨宮 痛切に感じます。大学はあらゆる面で変革の時代を迎えています。私はむしろ、こういう時こそ発展のチャンスだと思えます。ことしの入学式で、私が新学長として学生たちやご父母に申し上げたのは、われわれは「行学一如」の精神を遵守し、さらに、そこに現代的なセンスや解釈を加味しながら、知的生産力の高い、都市型大学を目指そうということでした。

在学中に、知識のみならず心も成長し、総合として高いレベルに達するという教育生産力とから成り立ちます。
米長 理想を高く掲げて、それに見合う形に大学を改革していく。具体的に、どんなことを考えておられるのですか。

「いまの時代が求める心の通った心の教育」

雨宮 いま申し上げた都市型大学ということにもかかわるのですが、都市の、しかも緑豊かな好環境にあるという大学の持ち味を、もっと積極的に活用しようではないか。つまり、先端性や国際性、あるいは文化面での就学環境に優れているだけでなく、首都圏住民の利便性が通いやすいという立地上の利

点を活かして、真に社会に開かれた大学を目指そうと思っています。
米長 勉学意欲のある人に、どんどん入学してもらおうという……。
雨宮 はい。そのために必要な入試制度改革に、すでに数年前から取り組んでいます。これまで、大学に入るには偏差値の門をくぐるしか道がありませんでしたが、たとえば小論文と面接だけを判定基準にする「社会人特別入試」とか、帰国子女のための「十月特別入試」といった多様な新制度を採用しました。来年度には、推薦入試、特別入試に重点を置いた新制度をさらに導入します。また、留学生の受け入れにしても、その受入を拡大するだけでなく、受け入れ後のフォローにも万全を期すなど鋭意改善を行っているところです。

米長 大学で教える中身についてはどうですか。
雨宮 カリキュラム改革という点では、平成八年に全面改定を行いました。新しい時代に対応するために、そこに三つのテーマを掲げました。第一は、より専門性を高めるために、一年次から専門科目を履修し、各講義に対する学生の満足度を高めます。第二は、科目選択の自由化で、従来のように必修科目で学生を縛るのをやめ、選択科目数を増やして本心に学びたいものを選べるようにしよう。第三は、学習の多様化で、その一つの表れに

宗教教育があります。一昨年度から全学共通科目として「仏教と人間」を採り入れたのですが、これは、純粋に学問として宗教をとらえ、人間の心のありようを、仏教とのつながりのなかで考えるというものです。
米長 すばらしい試みですね、それは。いまの学生たちも案外、そういうものに興味を引かれるのじゃないかな。
雨宮 おっしゃる通り。講義のあとで感想を聞くと、「もの見方が変わった、やってよかった」という声が多かった。いままで、人生や心の問題で真剣に悩むことはあっても、それを体系的学問に照らして考えてみるということが、あまりにもなすすぎたんですね。
米長 人として生きる姿勢を学べる場がないから、若者たちも、社会事象にどう対処していいのかわからない。大学に限らず、一本、心の通った人間教育がなされるべきなんです。

雨宮 同感です。そういった心の教育の一環として、たとえば課外活動にも本学では力を注いでいます。クラブ活動などを通じて、学生たちが学部・学科を超えて交流すれば、互いを磨き合うチャンスになるし、社会に出るためのトレーニングにもなる。そういう自由闊達な切磋琢磨のなかで、次代をリードし、かつ社会に貢献するような人材を育成していく。そのときに、多くの先輩によって受け継がれた「駒澤の伝統と精神」が必ずや力になってくれると信じています。
米長 これからの時代、駒澤大学の果たす役割は大きいですね。「心の駒澤」に大いに期待しています。



雨宮眞也学長 1935年山梨県生まれ。銀行勤務を経て、中央大学法学部卒。63年弁護士登録。74年駒澤大学法学部教授となり、91年法学部長、94年副学長、98年学長に就任。

雨宮 カリキュラム改革という点では、平成八年に全面改定を行いました。新しい時代に対応するために、そこに三つのテーマを掲げました。第一は、より専門性を高めるために、一年次から専門科目を履修し、各講義に対する学生の満足度を高めます。第二は、科目選択の自由化で、従来のように必修科目で学生を縛るのをやめ、選択科目数を増やして本心に学びたいものを選べるようにしよう。第三は、学習の多様化で、その一つの表れに

米長 これからの時代、駒澤大学の果たす役割は大きいですね。「心の駒澤」に大いに期待しています。



●東京・世田谷にキャンパスを構える駒澤大学は、現在、仏教学部/文学部/経済学部/法学部/経営学部の5学部16学科からなり、ほかに駒澤短期大学(4学科1専攻科)や大学院(5研究科12専攻)も併設している。